

青森市の文化財 1

三内靈園遺跡調査概報

1962年



青森市教育委員会



調査地域より東北方の展望

建物は国立松ヶ丘保養園

三内盤園遺跡調査概報

目 次

○序文 シリーズの出版にあたって.....	3
○三内盤園遺跡附近地形図.....	4
○三内盤園遺跡発掘調査概報.....	5
はじめに	
遺跡の位置	
発掘の概要	
遺跡の概要	
大穴の遺構	
むすび	
○土器及び土製品	12
○石 器.....	13
○昭和37年度三内盤園遺跡発掘参加者一覧.....	14
○発掘調査地域平面図.....	15
○発掘・遺物出土状態写真	16

シリーズの出版にあたって

青森市教育委員会教育長 加藤芳絹

青森市に文化財保護条例が制定され、文化財審議会が発足してすでに二年を迎えました。この間青森市の指定文化財候補物件を調査する一方、都市のぼう張に伴い、貴重な遺跡の破壊されるのを見るに忍びず、文化財審議会委員、市内高校教諭、生徒の協力を得て、埋蔵文化財を発掘調査することのできましたことについて深く感謝の意を表する次第です。

今後この計画は年を追って市周辺に及ぼすことになると思いますが、郷土の歴史を明らかにし、かつ学術上の参考文献として残す上からも、これらの資料を整備して刊行し広く識者の便に供することは、これまた大いに意義のあることではないかと思います。この小冊子が広く利用され、文化財への正しい理解と関心を深めていたければ幸いに存じます。

なおこの第一集を出すにあたって御多忙の中を編集の細かいところまで御協力をいたいたいた各委員の方々にあつく御礼を申し上げます。



三内塗遺跡附近地形図

三内靈園遺跡発掘調査概報

はじめに

青森市周辺に残存する縄文遺跡は相当な數量にのぼるらしい。とくに近時行われた町村合併の促進で新たに市に編入された地域には豊富に遺跡が埋蔵するようである。しかしこれら遺跡の大多数は、戰前から戰後にかけて土地の好事業家たちによる遺物採集場となつて、心ない乱掘がくり返され、あるいは土取場となつて、泥土採掘が進行したものほとんど減に類する遺跡すら見られるような有様である。これに対して、一方學術調査となると、遺跡の荒廃が進行のに比してはなはだしく遅々たるもので、現在までに調査の対象に取り上げられ精査を終ったのは、單に三内遺跡のみで、それもその一隅地にとどまり、他遺跡はほとんど放置されたまゝの状態にある。

ところが近時青森市の人口ぼう張で市営の三内靈園が狭くなつたために、年ごとに拡張が続けられ、自然それに伴つて付近に残存する遺物包含地も漸次蚕食され、靈園近傍の遺跡全城が破壊されつくし、消滅する恐れすら生ずるにいたつた。

今回発掘調査のために選定した遺跡は、近々に予定された靈地編入候補地の一部に当り、円筒形土器の包含地として戦後になってから脚光を浴びたところである。発見された時期は比較的新しいが、それにもかゝわらず乱掘の被害からぬかれることができなかつた。その上さらに墓地と化して、永久に遺跡が喪失する危機が迫つてゐるので、時間を使つて悔いを残すことをおそれ、青森市文化財審議会にはかつた結果、青森市教育委員会が発掘調査を行うことを決定した。かねがね本遺跡に対して多大の関心を示し、青森市に調査をしようとしてきた県立青森高校社会研究部生徒らの希望なども参考しそれ以外の青森市内にある高等学校生徒の協力が得られることになつて、急きよ発掘に手を染めることとなり、そのため発掘担当者として、

青森市文化財審議会委員	者	倉	勇	八
同	井	上	久	
同	小	野	忠	明

以上の三名がその任に當つた。発掘の期間は昭和36年10月27日から29日まで3日間をとり、発掘作業はすべて県立青森高等学校社会研究部、市立中央高等学校郷土部、市立青森第一高等学校考古学部に所属するクラブ員と指導教師に委ねることとし、その外に青森市教育委員会事務局から社会教育課係長浅利健蔵、課員小田松三郎、同相馬滋視らが加わり、主として事務的なことや鍼用の処理を受け持つた。

発掘調査にあたる期間は、あたかも低気圧の襲来にあひ3日間を通して荒天になつた。ことに最終日は暴風雨警報が出るような険惡な天候だったので、そのため作業は離脱し調査は妨げられたが、生徒の誠実な努力で、とにかくおおむね所期の調査を経て一応終結することが出来た。ところが終了間際になつてから、既発掘トレンチ内から未発掘の部分にまたがつて穿たれた直径2mの大穴が存在することが確認されたので無視しがたくなり、大穴付近の埋め戻しを一時中止して鋏意その検討につとめた。遺構は同時に多数の人員が作業することが不能なので調査の進歩が窓のまゝにはかどらず、

究明が徹底を欠いたまま時間に追われて、心を残して作業を打ち切らざるを得なかつたもちろんこんな大穴が存在することは、調査着手以前から予想されたものではなかつたが、注目にのぼつたこの遺構は、人工によつて穿たれたものと断定し得ることや、その内部から數体の土器があたかも人為的に格納されたような遺存状態で検出されることなどから、調査員の関心をあつめるところとなり、とくに重視されて、次年度の継続調査が切望された。だが、この希望はおそらくは空しいものと思われた。上述のように遺跡を含むこの地域一帯は、すでに墓地予定地になつてゐるので、靈園に編入されることは必至であり、その時期も目前に迫る状勢なので、遺跡の継続調査はとうてい不可能事のように思われて関係者をいたく残念がらせた。

しかし買収交渉の延引などから奇蹟的にこの遺跡の一部が墓地から除外されることになつた。そこで希望して止まなかつた遺跡の再調査が昭和36年度に統いて行われることとなつて、第一次発掘に参加した青森市内の三高等学校と、それに新しく県立青森工業高等学校生徒を加え、第一次調査のとき検討未熟のまゝ中絶した大穴遺構の精査に集中する計画をたてて発掘に着手することを得た。昭和37年度の調査時期は、前年度とは異り高等学校生徒の夏季休暇をねらつて昭和37年7月27日から31日まで5日間の日程で行わることになつたので、酷暑のさ中に當るため、作業に從事する生徒の健康管理にはとくに気を配つた。幸いにこの第二次調査は好天にめぐまれて、事故者を出すこともなく予期を超える成果を得て本遺跡の調査を完了することが出来た。

以下二回にわたつて行われた発掘の概要を収録する。

遺跡の位置

本遺跡は青森市大字三内字沢部353番地の並泡繁吉氏の耕地内に遺存する。

われわれが調査の対象に選んだ場所は、青森市営三内靈園の北西部に隣接する遺物散布地で、標高80mの台地突端部に形成する舌状台地の縁辺に近い洪積層の上に発達している。遺跡が造営されたこの地点は北方に松ヶ丘保養園の建物を見下す位置を占め、北東方は海に面して眺望が開けており、海岸平野を距て、青森湾の波浪をのぞみ、さらにその先に眼を転ずれば青森湾を抱くように伸び出した津軽半島・下北半島を一望の間に收めることが出来る。そして東方は青森市の市街地を形成する家なみを、南方には屏風のように眼界をさえぎる八甲田山の連峰を負う。いわばここは景勝の地である。それにしてもこんな場所は仮に居住の場とするには、必ずしも好適な立地条件を具備するものは考え難い。本遺跡が造成されたころは、景観が現在とは多少異つていて、海岸線が現今よりずっと深く内部に入りこんでいたものと推量されるので、現在よりなおさら東方や北方から吹き上げて来る風は、まともにこの台地をおびやかしたことと思われる。冬季は季節風が運んで来る吹雪の猛襲からも逃れることができなかつたことであろう。しかしこんな想像は無用なものであろう。绳文式遺跡のうちには、往々にしてことさらわれわれの考えを裏切るような場所に遺跡が営まれることが少からずあり、場合によると想像を超える例さえ見受けられる。

ともあれ、本調査地の南東方約1500m距たつたところに、水田を経て、ゆるやかに起

伏する丘陵がある。こゝは通称館荷林とか押し流れの地名で呼ばれるところで、円筒形土器から後期や晩期にかけて焼成された数形式の土器を複合包藏する遺跡として知られ、青森市在居のコレクターとしてこえた故成田彦栄氏と慶應義塾大学教授清水潤三博士らの手で、昭和38年までに四回にわたり発掘調査が行われた。その調査の際に両氏はこれまで俗間に呼びならされていた三内遺跡の呼称そのまゝを踏襲したので、これと混同をさけるため、今期の調査地を、それに接続する遺物包含地も総括して三内遺跡と命名することにした。もっとも本三内遺跡は、單一のものかまたは数遺跡が近接して形成するものか、現在の所見からはつまびらかでない。

発掘の概要

昭和36年度の第一次調査では、本遺跡調査のために遺跡地の北端に、南東から北東にのびる $2m \times 10m$ トレンチを二本並列して設定した。そして記録の便宜などを考慮して、この二本のトレンチを夫々 $2m \times 2m$ ずつの小区に細分し、aからeにいたる枝番号を付した。調査に参加した生徒は各学校ごとに多寡があるので、発掘区域を大体その学校の生徒数にあん分し、三日間の発掘作業がほぼ順調に進められたが、既報のように最終間際に近くになってから思い切けぬ大穴遺構が確認されるに及んで、が然緊張した。この問題の遺構は、Bトレンチのほぼ中央に当るBo南西端から未調査地区にまたがって遺存するらしく、本遺跡では中核的な役割りを有するものと推測されるので、昭和37年度の第二次調査では、Bトレンチに並列してC・D・E三本の $2m \times 10m$ トレンチを設定した。これは大穴遺構を中心に解明する配慮に出たものである。以上のトレンチを設けることは事前に一応決定していたが、出場人員が予期したよりも多數なので、作業量を勘案してAからEまで五本のトレンチ北西部をなお $2m$ ずつ延長することにし、fの枝番号を付した。そのため第一次と第二次調査を通じて発掘した総面積は 120平方m に達した。ついで既設したトレンチの北西部に、枠外として 2平方m の単独小区をとり発掘を試みた。

遺跡の概要

このようにしてトレンチを設定して発掘を進めるに当って、遺跡を構成する泥土の層序を確めるために、Deその他数箇所について土層を検したが、最上位に被覆するのは黒色腐蝕土で、この層についてその下位に土黄色砂質層があり、それに続く粘土層の順序になる。仮にこれを上位の分から順次第一層・第二層・第三層と呼ぶことにする。Deで測定した結果について見ると第一層は $42cm$ 厚・第二層は $30cm$ 厚・第三層は優に $200cm$ を超える堆積層になっている。もっともこの各土層の厚薄は一様ではなく、それに部位ごとに相当に大きい差異が見られる。これをなおCaについて測定すると、第一層は $50mm$ 厚となっているし、第二層は $27cm$ 厚で、その下位が粘土層になる。この部分では第一層と第二層の中間に $30cm$ 厚に火山灰を多量に含有する腐蝕土をはさんでいるのでこの点ではDnの場合と大分趣を異にするようである。

火山灰はCaだけでなく、調査全域を通じて断続不同的の状態に堆積が検出されている。

思うに本遺跡が造営された後のある時期に、この付近火山の噴火によって生じたものであろう。これを端的に想像すると、その成因を八甲田山の火山活動に求められるであろう。本例のような火山灰の残存は、つとに三内遺跡でも指摘されているので、両者の生成は同一時期にあるだろうが、時期に関しては肉眼による証左は求むることが出来なかつた。

本遺跡を造営した地域の洪積層上表は、南西部から北東部にかけて大きく傾斜し、南西部で現在の地表から深度50cm内外、北東部で100cm前後から約120cmを測定される。この傾斜面に遺跡を經營しているが、そのため基床面は格別顕著な工作的跡は見られなかつた。すでに問題視してきた大穴遺構は、発掘地域のBに設けられ、その一部はCeにまたがつて遺存する。あたかも大穴が本遺跡全般の枢要部であるかのように、Bf・Ce・Ef Da・Eaからも直徑100cm前後の穿孔が五個検出された。この孔は大穴に対しても無縫とは見なしがたい配序を示し、Ceを除いて他の四孔はいずれも1体から2体の土器を人為的に収納している。大穴の南西部Dbには、床面を浅く掘り凹めた約30cmの広さをもつ場所がある。この凹所は小量の木炭を含む2.5cm厚から9cm厚の灰層が残存している。そしてその周辺に、ほゞ対角線上に5m前後に粘土を盛り上げた簡単な施設が検出されたこの部分も火をかぶった明徴が見られるので、遺構は一種の炉址と断定し得るようである。この炉址と考えられる場所に近く傾斜した小孔を二個検出したが、これを柱穴のようなものとはなしがたい。むしろ炉址と推測した施設に附隨し何らかの役目を有したものであろう。なお床面の焼土は、この部分だけでなく大穴の北部から西部にかけて点々として確認されたが、他は炉址などとは認めがたいので、おおむね火山現象などで生じた二次的なものと考えられた。

人工遺物は、粘土層の床面と共に挙げた第一層及び第二層の土中に検出されるが、第一層も第二層も共に原位置を保有するものとはなしがたいので、搅拌を経て遊離した二次的な遺存とすべきである。ことに第一層は搅拌が徹底に行われているので、遺物の人為的な配序は想定すべくもない。たゞ雑然として泥土のうちに混在する。この層では小量の石器以外に、完形土器はおろか復原の可能な土器は皆無であった。第二層もやはり搅拌の手をまぬかれることが出来なかつたようだが、それでも第一層に比べると被寄程度の緩慢な部分が多いので、場所によつては原位置の想定が可能な遺存例もある。この層からは僅少の完形土器も検出され、復原可能なものも数体を発見した。土器は本遺跡では調査全域から検出されたが、ことにCトレンチに最も多く密集し、B・D・Eトレンチの順位に残存を見た。

本遺跡の遺物に関して、いさゝか理解に苦しむのは、土器の優勢なのに対して石器がはなはだしく劣勢を示すことで、本期の調査で採集し得たのは、石器・石匕は合せて僅々十指を屈するに満たない有様である。一般にこの種の円筒形遺跡では近傍の安田・三内・潮辺地塊遺跡などについて見ても、石器・石器の如きの石器が顕著に出土するのが通例だが、本遺跡ではまことに寥々たる観を呈している。しかも劣勢な石器のうちに块状耳筋や硬玉製大型裝玉のような比較的稀少な遺物を含んでいることが目立つ。石器ではないが土偶も検出されている。それで石器の劣勢なことは、むしろ本遺跡の特質に通ずるもので、本遺跡を特長づける顕著な標識と受け取ら得るように考えられる。

直立したまゝ、あるいは倒立して床上から検出された土器は本調査で9体を記録した。この9体はほゞ原位置を保有したものと考えられた。この原状を保つたと推定される土器のうちには、あたら上半身を欠失したものも含まれるが、いざれも遺跡造営当時の状態を伝えるものとして重視した。9体のうちCeに残存する二例は倒立のまゝで床面に置かれていた。それを除く七例は、例外なしに粘土層を15cmから20cm内外掘り凹めて、そこに器底をはめ込んで器の安定を保っている。とくにA号で検出されたものは、粘土層を35cmも掘りこの孔中に土器の全身を完全に埋没して、土器の口唇部と粘土床面が同一の面をなすような状態で発見された。これはもづら土器を安置するためにとられた方法で、いうまでもないが偶然のものとはなし難い。人為によってなされたことは明瞭である。これらの土器を採集する際にとくに細密な検討を加えたが、粘土層には土器を植えた凹穴以外に堅立った施設は検出されなかつた。

土器の中でもとくに安定を欠く尖底土器のような類は、その一部かまたは全体を土中に埋めることで安定を与えるような使用法が行われたことは、先学によつて指摘され、想定されていたが、小野がかつて朝鮮黃海道鷹嶽山の山麓に所在する石器時代住居址調査で、炕辺の床上に凹所をつくり、その凹部にお中央に孔を穿った板石を累ねて置きそこに土器の下半身を嵌入安置した例に遭遇した経験を有している。このように土床に孔を設けるだけでなく、それに板石を戴せることで、一層強固に土器の安定が得られたことは論を待つまでもあるまい。

このように本調査で原状保有のまゝ多くの土器を検討する機会を得たことは、今期調査の収穫の一つに数えることが出来るだろう。けれどもわれわれがこの土器の保存状況に格段の关心を有するゆえんは、単にそのことのみに留まるものではない。この土器の有り方が大穴遺構に対して、諒然と一定の嚴正な配序を示すものと理解されたからである。これはCe・Ia・Feの残存土器から、ことに配列の意図が明確に看取されて感銘を得た。それで原状保有の土器に関しては、土器が内蔵する遺物にも多大の注意をはらつたが、器内に充満する泥土中に多少の植物炭化物と思われるものが検出されたに留まりそれ以外の収藏物は見られなかつた。

ちなみに、泥土の第一層から粘土層床上までの間に検出の土器形制は、加曾利式に比定される一例が混在するほか、他はすべて円筒上層式に所属する。円筒下層式は一片も見ることができなかつた。

大穴の遺構

本調査でわれわれが最大の興味を寄せたのは、大穴とその周辺を点てつしてうがたれた五孔が構成する一連の遺構である。こゝに本遺跡の持つ特性を解明する鍵を秘めるようと思われたからである。

この遺構のうちでとくに顕著な大穴は、BoトレンチからCoトレンチにかけて粘土層に垂直にうがつた短円筒形のもので、口径は約200cmを測定し、深度は粘土表面から245cmまで調査を経たが、なお穴の基底部に到底することが出来なかつた。深度245mmで発掘を中止したのは、もづら作業する生徒の危険を考えたからで、そのために正確な深度

の測定をすることができなかつた。穴の内壁面は、精査を経たが掘削痕は残存しない。内壁のところどころが水蝕によつて侵されているので、穴の全容は当初より多少変形しているように思われた。穴の内部には、小量の粘土塊を交えた黒色腐蝕土と土黄色砂質土の混交土が充満している。この埋没した泥土中には細片化した木炭や植物の炭化物大小不規な数個の川原石が混在した。

この遺構を埋める泥土中では、石器は出土しなかつた。5体の完形土器と數十片の大型や小型の土器残片を検出した。それで完形土器に残片を加えると、約10体前後の土器が残存したものゝようである。もつともこんな想像はおそらく不当なものであらう。ここから発見された土器残片は、部分的には接合の可能なものもあるが、いずれも完形復原できなかつたので、当初から残片の状態にあつたとする方が妥当なようである。これら完形土器は、穴の内壁にもたれて直立し、または横軸や転倒の遺存状態を示した。そのうち一例だが、大型土器に小型土器を収藏したものがある。残片土器は泥土の隨所に混在し、深度が降るに従つて稀薄になるが、それでも発掘を中止するまで続いて検出されているので、さらに未調査の下位にも存在することが考えられる。完形土器からは内蔵遺物が検出されなかつた。これら土器に關連して注目したことは、こゝから発見された土器形制で、粘土床で見ない円筒下層式の箇ちゅうに属するものを含むことである。このことは調査員を苦慮させた。仮に現在見られる粘土層が何らかの事情から人工で形成されたものとすると、あるいはこの下位になお人工遺物層が伏在するかも知れない。そんな疑念が生ずるので、大穴に近いC₀に遺跡床面から2m余試掘して検討したが、人工遺物層は発見されないので、単にき憂に過ぎないことが確認された。しかしこのことに関しては的確な解明を得ないまゝに心にしこりを残した。本遺跡の南接地域は、最近墓地に編入整地され、そのため人工遺物が地表に浮び出たのに着目し、ここで地上採集を試みた結果、58片中に3片の円筒下層所属の土器残片を得た。これは全土器中約5パーセントに相当する数量で、参考に供し得るようである。

大穴と密接に連繋して特異な遺構を形づくる他の五孔は、調査の便宜から、Daに検出したものを第一号としE_a・Bf・C_a・Efの順位に、それぞれ第五号にいたる仮称を付した第一号孔は、孔径約100cmを有し、深度は90cm前後につくられた掘削孔で、この孔中は、前記大穴のものと同様な土質の泥土が充満していた。孔中にはおそらく3体の土器が存在したものと思われるが、発掘が粗略不用意で1体を破砕し、その残片の過半を発掘した泥土中に置いて紛失したので、原形に復するにいたらなかつた。他の2体は完全に孔の底面に置かれたまゝ直立して残存した。これは人為による収納であることに疑いをはさむ余地がないものと思われた。第二号孔は第一号孔よりは幾分か小型で、口径約70cm、深度88cm前後で垂直にうがたれ、孔内には前のものと同質が充満して、直立の状態で完形土器1体を採集した。この土器も内蔵遺物が見られない。ついで第三号孔だが、口径は約90cmを示し、孔の上部部に土器残片の堆積を見たのみで、時間ぎれのため孔内の検討を中止した。それで収藏土器の有無は確認にいたらなかつた。第四号孔は孔の形状が不整で口径が約90cm、深度110cm前後で基底部に到底しないまゝ発掘を中止した。本孔のみは内部につめた土質が他のものと異り、粘土塊を多量に交えた土黄色砂質土で小片化した土器3片を検出したに留まる。第五号孔は他の四孔よりは比較的大型で、口

径で150cm前後を測定される。本孔とその周辺は豊富な土器堆積をなしているが、孔中から横軸して残存する1体の完形土器を採集したのみで、発掘時間を使い果し作業を中止したので、内部の検討に手を延ばし得なかった。以上の五孔から検出した土器形制は、いずれも円筒上層式に属し、円筒下層式は交えない。また石器及び他の人工遺物は発見されなかつた。

むすび

三内墳調査跡は、昭和36年度から昭和37年度にかけて、通算8日間の発掘調査を行つた。第二次の調査が終了したあと、引続いで8月3日までを出土遺物の整理にて、主として土器の復原と記録の整理に費した。このようにして発掘面積が120平方mに及ぶ地域の全調査を終結した。

本調査の概要はすでに収録したごとくである。われわれはこの調査で多くの収集をおさめたが、それとともに遺跡の残存状態が急速に断定し難い特異なもののが提示されているのに注目した。本遺跡を住居址とする可能性は乏しい。炉址と見られる施設を検出したが、それ以外に柱址とかその他住居址の認定に不可欠な遺構は検討にのぼらなかつた。しかもそれに代つて予測しない大小六個の穴と、それに随伴するように床上に直立や倒立して安置した9体の土器から構成される顯著な配序を遺存する遺構が眼前に展開して、われわれをうろばいさせた。さらに各孔の内部から10体の完形土器と數十片の残片土器が検出され、これは明確に人為によつてされたものと判定された。このように本遺跡は、何らかの特異な意図の下に構造した異例の遺構であることを示している。このような特殊な遺跡に対して、一応可能らしい想像を加えることは出来よう。たとえば古代宗教につながる祭祀遺跡のような場合が想像にのぼる。祭祀のための奉獻の場所であるかもしれない。あるいは一種の葬場と見なすことが出来るかもしれない。それ以外に集会の場所とすることも出来よう。しかしかつてこれに類似する構造を示す遺跡例を見ない現在、妄想はさけなければなるまい。それで同種の遺構の発見を期待し、後考にまつて本遺跡の持つ性格に結論を得たい。

付記

本次の調査に際して多くの人たちの援助を得た。飛内正六青森市助役・加藤寿綿青森市教育委員会教育長・渡辺助助青森市社会教育課長や佐々木義満・小野忠正・成田末五郎・板谷八郎氏らから激励を受けた。とくに柿崎実青森市地区整理課長は公務の予暇をさいて生徒に遺跡の測量実習を指導し、市立青森第一高等学校と県立青森高等学校O.I.Bの薄賀三郎・小笠原康生・神武・杉田栄一君らは発掘に参加して、すでに習熟した発掘技術によって調査に力を添えた。付記して謝意を表明したい。

土器及び土製品

円筒形土器	円筒下層式	焼成形品	5
円筒形土器	円筒上層式	焼成形品	23
高坪形土器	円筒上層式		2
深林形土器	加層利式		3
士器瓦片	円筒上層式		1
土偶	板状	焼成形品	1括
		久	1

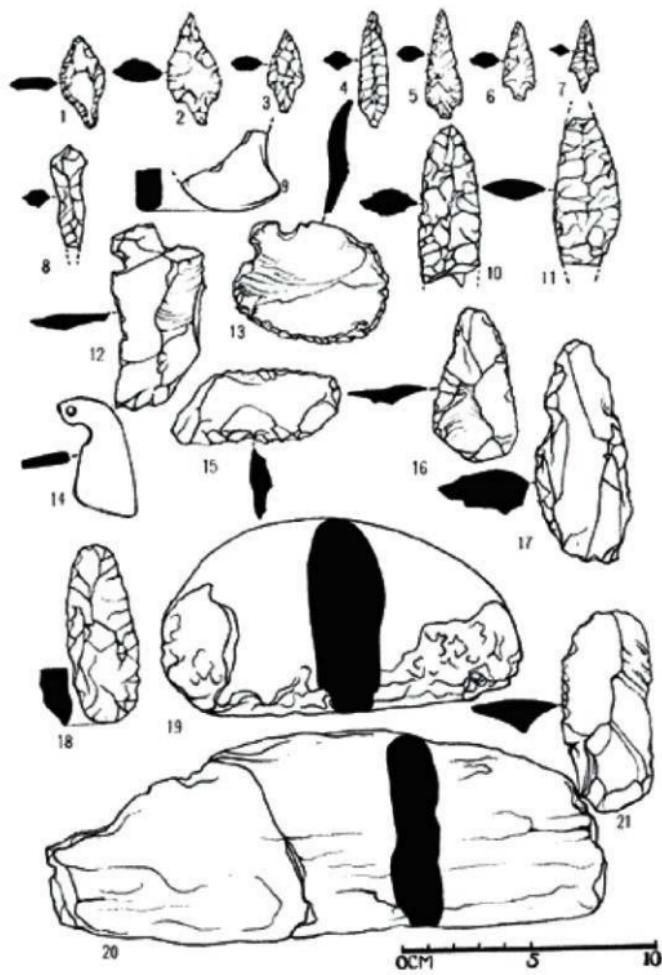
石器

石	鐵	有茎	7
石	槍	不詳	5
石	銀	無	1
石	鉢	よたこて形	1
尖頭真磨	石斧		2
打製石斧		短削形	2
双刃		無	5
石冠		燒成形	4
研磨具		月形	2
研磨具		半月形	1
研石		小	7
块状耳鉢		形	5
硬玉製飾		燒成形	2
		残	1
		久	1

其他

川厚石	石炭		
木	炭		1括

石 器



1 ~ 7 石 破
8 石 破
9~12 石 破
13 石 破
14 石 破
15 石 破
16 石 破
17 石 破
18 石 破
19 石 破
20 石 破
21 石 破

8 石 破
9~12 石 破
13 石 破
14 石 破
15 石 破
16 石 破
17 石 破
18 石 破
19 石 破
20 石 破
21 石 破

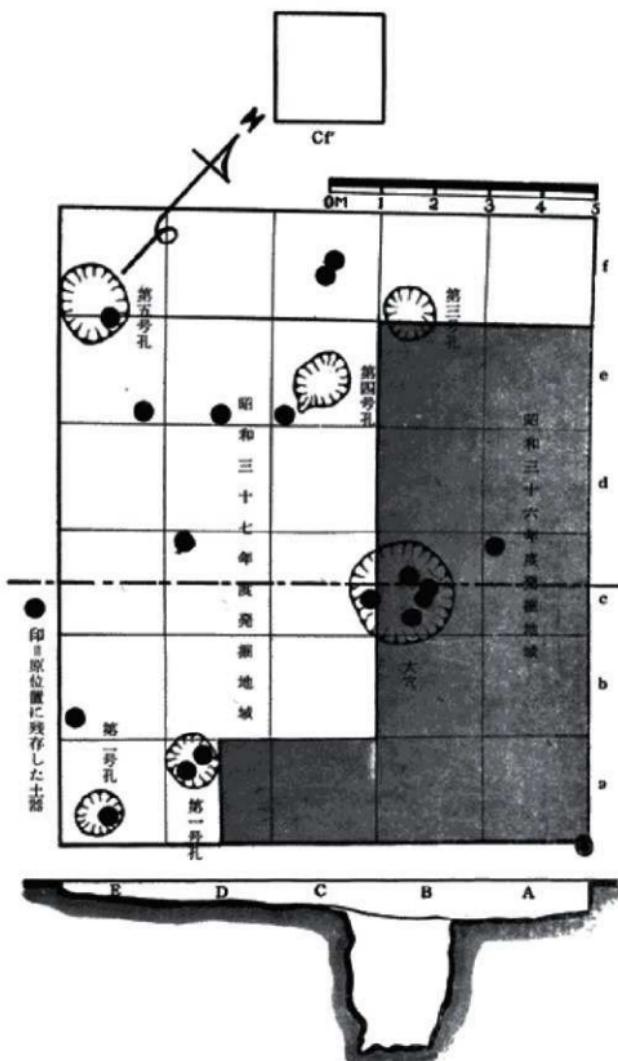
10~11 石 破
12~13 石 破
14 石 破
15 石 破
16 石 破
17 石 破
18~21 石 破

昭和37年度三内電開遺跡発掘参加者一覽

○発表担当者	市文化財審議会委員	小井香祐	野上倉崎田	忠志	明久八重
	タ	吉	田	ス	タ
○発表参加者	青森高校卒業生	神野	苗原田	三浦栄一	武郎生
	タ	野	田	ス	タ
	第一高校卒業生	喜	佐	三	利昭
	タ	喜	杉	康	夫
	タ	喜	松	榮	秀
高校教諭	青森高校教諭	田	口川	上	征勝
	工	藤	鳥部	秀	俊
	第一高校	口	藤	徳	行
高校生徒	青森第一高校	山	阿佐	子	他13名
	第	中	佐	地	他7名
	中	工	東	地	他13名
	工	業	田	地	他8名

○來訪者	青森市助役	飛内正六
	青森市教育委員会教育長	加藤綱
	青森市文化財審議会長	佐々木義
	青森市文化財審議会委員	板谷八郎
	私の大学教育学部助手	村越潤
	青森県文化財専門委員	成田末五郎
各新聞記者他多数		他学生2名

発掘調査地域平面図





朝靄の中、発掘地で説明を聞く高校生



発掘地から北方青森湾をのぞむ



したたる汗をぬぐいながら調査ととりくむ男女
高校生。参観者の姿も見える。



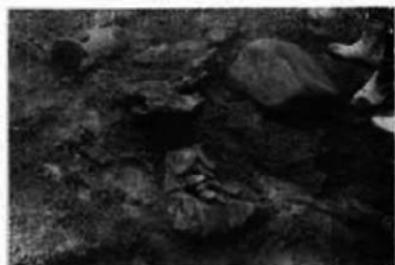
発掘、記録、遺物整理と作業は炎天の中
を止むことなく交替でつづけられる。



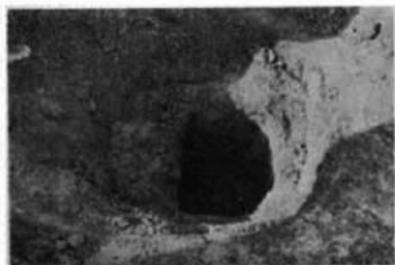
遺物残存状態



遺物残存状態



遺物残存状態



上部より大穴を見る



大穴の発掘をつづける高校生



出土土器(約5分の1縮尺)



出土土器(約5分の1縮尺)



出土土器(約5分の1縮尺)



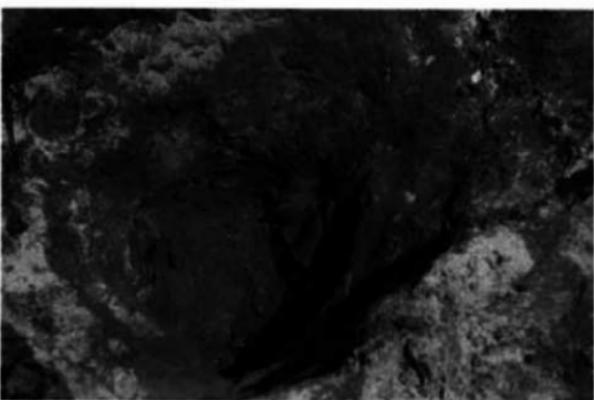
直立土器残存狀態



土器殘片殘存狀態



大穴と遺物の現存状態



大穴と遺物の残存状態



土器残存状態



块状耳饰残存状态

青森市の文化財 1
三内靈園遺跡調査概報
昭和 37 年 12 月 25 日

発行所 青森市教育委員会
印刷所 株式会社 誠工社